

バブリオス集の受容と変質に関する一考察 ——アトス写本の後辞が示すもの——

吉川 齊

1 はじめに

バブリオス集は、2世紀前後に編まれた、2巻からなる古代のイソップ集である。主要写本は大英図書館に所蔵されている10世紀頃の写本であり、発見された場所にちなんで、アトス写本と呼ばれる^{*1}。現在バブリオス集として扱われるイソップ集は、基本的に、アトス写本を中心とし、その他散在する話をまとめて校訂したものである（以下、アトス写本をA写本と表記する）^{*2}。

もともと、〈バブリオスの話〉は、〈イソップの話〉をコリアンボス詩形で語るものであったと考えられる^{*3}。〈イソップの話〉とは、その

^{*1} Codex Athous. British Museum Additional 22087. 1842年、マケドニア出身のミノイデス・メナスによって、アトス山のラブラ修道院図書館で発見された。アトス写本については、現在、下記の大英図書館のウェブサイトにて高解像度のデジタル画像を閲覧可能である。本稿は同画像データを利用した。

http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Add_MS_22087 (2013年12月1日確認)

^{*2} Boissonnade(1844), Lachmann(1845), Lewis(1846), Rutherford(1883), Crusius(1897), Perry(1965), Luzzatto&La Penna(1986) など。

^{*3} 本論では、バブリオスとの関わりが考えられる〈イソップの話〉について、とくに区別を要する場合、バブリオスの〈イソップの話〉あるいは〈バブリオスの話〉と表記する。

名の通りイソップが語ったという〈話〉である。古くはプラトンやアリストファネスの作品中に、イソップの名と共に用いられる〈話〉の存在を確認できる*4。その一方で、個々の〈話〉について、イソップが実際に語ったものであるかどうか確認することは難しい。本論で扱う〈イソップの話〉は、イソップが語ったという体裁を基準とする。すなわち、イソップの名と共に用いられた話やイソップ集に含まれる話など、作家によって直接的あるいは間接的にイソップとの関係が示される〈話〉を〈イソップの話〉として扱う*5。この場合、〈バブリオスの話〉は、バブリオスが〈イソップの話〉と認めて詩形で示した〈話〉ということもできる。

A 写本に残るものの他、〈バブリオスの話〉は二つの写本にそれぞれ 30 篇程度が認められる (G 写本、V 写本)*6。G 写本は 11 世紀頃のもので、〈バブリオスの話〉を 31 篇含み、そのうち 28 篇は A 写本にも見られる〈話〉である。一方、V 写本は 14 世紀頃のもので、29 篇を含む。そのうち 17 篇が A 写本にも見られる〈話〉となっている。ただし、これらは A 写本とは異なり、〈バブリオスの話〉のみを纏めたものではなく、イソップ集の一部に〈バブリオスの話〉が包含される形で残る。したがって、G 写本や V 写本においては、A 写本との対応や韻律が〈バブリオスの話〉を判断する手掛かりとなっている。

A 写本においては、それぞれの〈話〉がアルファベット順に配置されている。o で始まる〈話〉まで現存し、42 葉に 122 話と 123 話の 1 行目までが含まれる。また、冒頭と 107 話目の後ろにそれぞれ第一巻

*4 Pl. *Alc.I.* 123A; Ar. *Pax.*129 など。イソップの名は、ヘロドトスが『歴史』2.134 において言及している。

*5 本来はイソップとは無縁の〈話〉であっても、後にイソップと関連付けられる〈話〉であれば、〈イソップの話〉として扱う。この場合は、「イソップ認定されうる〈話〉」としての〈イソップの話〉である。

*6 写本 G (Codex 397 Pierpont Morgan Library) および写本 V (Codex Vaticanus Graecus 777)。両者に含まれる〈バブリオスの話〉の数と A 写本との対応については、Luzzatto&La Penna (1986, pp.XXV-XXVIII) を参照。

と第二巻の序歌と目されるものが置かれている。第二巻の序歌が中間であるとする、A写本では、およそ200篇の話が含まれていたと推測できる。

1.1 アトス写本における後辞

ところで、〈イソップの話〉には、“後辞”が附される場合が多い。後辞は、たとえば日本最初のイソップ集である『エソポのハブラス』*Esopo no Fabulas*で、Xitagocoro.として区別されている部分である。後辞では、〈話〉に対する解釈から、いわゆる教訓や処世訓、あるいは人間の性質などが導き出され、一般化して語られる。現在の「イソップ寓話」「イソップ物語」など呼ばれる〈話〉は、こうした教訓を前提とした〈話〉として普及しているように見える。なお、『エソポのハブラス』に限らず、中世以降のイソップ集では、多くの場合、こうした後辞が各話に附される。

A写本においても、同様にそうした“後辞”が附されているが、A写本では、そこに2種類の後辞が認められる。ひとつは、韻律を持つ後辞(=後辞¹)、もうひとつは散文で記された後辞(=後辞²)である*⁷。いずれも基本的に開始行の右側に区切り記号が附され、後辞であることが示される。ただし、後辞¹において、区切り記号がなく、左に一字頭出しされて区別されるものもある*⁸。また、後辞²は字体が変えられており、後辞¹と明確に区別される。

A写本における後辞の付与パターンは、以下の通りである。

1. 後辞¹のみ 26篇*⁹
2. 後辞²のみ 58篇*¹⁰
3. 後辞¹と後辞² 20篇*¹¹

*⁷ Luzzatto&La Penna(1986)では、epim.¹およびepim.²と表記される。

*⁸ Bab.4; Bab.9; Bab.11; Bab.20; Bab.43.

*⁹ Bab.4; Bab.5; Bab.10; Bab.11; Bab.14; Bab.20; Bab.22; Bab.23; Bab.24; Bab.29;

また、後辞¹も後辞²も附されていない話が18篇存在する。興味深いのは、それら後辞が附されていない〈話〉すべての後ろに、空行が1行または2行置かれている点である*¹²。それらは、Luzzattoの指摘する通り、おそらく後辞²を挿入するための空行であろう*¹³。A写本では、(少なくとも現存するものとしては)すべての〈話〉に後辞ないし空行が置かれていることになり、つまり、すべての〈話〉に後辞を附すことが想定されていた、と考えられる。

これら2種類の後辞のうち、後辞¹に関しては、近年の研究者には、

Bab.31; Bab.33; Bab.34; Bab.35; Bab.40; Bab.41; Bab.43; Bab.44; Bab.56; Bab.59; Bab.67; Bab.79; Bab.87; Bab.98; Bab.107; Bab.111.

*¹⁰ Bab.1; Bab.2; Bab.3; Bab.8; Bab.15; Bab.16; Bab.17; Bab.19; Bab.26; Bab.27; Bab.28; Bab.32; Bab.37; Bab.42; Bab.45; Bab.46; Bab.48; Bab.49; Bab.51; Bab.53; Bab.54; Bab.61; Bab.62; Bab.63; Bab.68; Bab.73; Bab.75; Bab.76; Bab.77; Bab.78; Bab.80; Bab.83; Bab.85; Bab.86; Bab.88; Bab.89; Bab.90; Bab.91; Bab.92; Bab.93; Bab.95; Bab.97; Bab.99; Bab.100; Bab.101; Bab.102; Bab.105; Bab.106; Bab.108; Bab.109; Bab.110; Bab.113; Bab.114; Bab.117; Bab.118; Bab.120; Bab.121; Bab.122. ただし、Bab.1およびBab.83には後辞²が二つ附されている。校訂本は、Bab.1については両者を一つの後辞²として、Bab.83については二つのうち一つを後辞¹として扱う。また、Bab.85については、A写本は後辞²として字体を変えるが、校訂本は後辞¹として扱っている。

*¹¹ Bab.9; Bab.12; Bab.13; Bab.18; Bab.21; Bab.47; Bab.50; Bab.52; Bab.60; Bab.64; Bab.71; Bab.72; Bab.74; Bab.81; Bab.82; Bab.84; Bab.94; Bab.96; Bab.103; Bab.104. なお、Bab.74とBab.104についてA写本は後辞¹を区別するが、校訂本は後辞¹を区別しない。後辞の扱いについて、本論はA写本の区別に従う。

*¹² 空行は、後辞が附されていない話18篇(Bab.6; Bab.7; Bab.25; Bab.30; Bab.36; Bab.38; Bab.39; Bab.55; Bab.57; Bab.58; Bab.65; Bab.66; Bab.69; Bab.70; Bab.112; Bab.115; Bab.116; Bab.119)の後ろ、及び、Bab.23とBab.40の後ろ、の計20篇の後ろに見られる。Bab.23とBab.40には後辞¹が附されており、例外的なパターンといえる。Bab.23は話の頭文字のアルファベットの変わり目で、Bで始まるものの最後の話。Bab.24からΓで始まる話となり、Bab.23の後の空行には「Γの始まり」と記されている。ただし、他のアルファベットの切れ目で同様の措置がなされているわけではないため、空行とアルファベットの関わりははっきりしない。Bab.40については、Bab.23のような形式的な切れ目も見いだせない。Bab.38, Bab.39と空行が続いたことが、Bab.40でも空行が置かれてしまったひとつの原因かもしれないが、詳細は不明である。

*¹³ Luzzatto&La Penna(1986), p.XCVI.

大きく三つの立場が見られる。すなわち、それら後辞¹について、バブリオス本来のものとして1) 一部を認める、2) 全て認める、3) 全て認めない、というものである。一方、後辞²については、基本的に注記ないし削除の対象である（あるいはそもそも記載されない）^{*14}。

たとえば、Perry は、あるものは残しあるものは削除の対象とするが^{*15}、Adrados は、現に附されているものを削除する積極的な理由はないと主張する^{*16}。一方、La Penna は、後辞そのものに懐疑的な姿勢を示してもいる^{*17}。さらに遡ると、Boissonade は後辞¹を本文内に残して削除対象ともしないが、Lachmann や Lewis は後辞¹の一部を削除対象とし、Rutherford は後辞¹を本文とは区別する形で扱う。また、Crusius は後辞¹全てを削除対象とする。こうした扱いの相違は、後辞¹とバブリオスの関係についての各研究者の判断に拠るものである。バブリオス集を復元するという点で、後辞の扱い方は重要な問題ではあるが、残念ながら、いずれの立場も積極的な根拠があるわけではない^{*18}。

また、G 写本や V 写本においても、後辞の扱いはまちまちである。両者の A 写本と共通な話のうち、後辞¹は G 写本で4篇に残るが、V 写本にはない。一方、後辞²は G 写本では見られず、V 写本では13篇に附されている。なお、V 写本では、A 写本と共通しない話でも、10篇に後辞²が附されており、含まれるほとんどの話に後辞²が附さ

^{*14} 後辞²について、Boissonade(1844)は本文下に少し間を空けて記載、Lachmann(1845)とLuzzatto&La Penna(1986)は註記、Crusius(1897)は削除対象として掲載し、Lewis(1846)、Rutherford(1883)、Perry(1965)は掲載しない。対応に相違はあるものの、いずれの研究者も後辞²をバブリオス本来のものとは認めていないように見える。

^{*15} Perry(1965), p.lxiii.

^{*16} Adrados(1999), p.452.

^{*17} Luzzatto&La Penna(1986), p.XCVI. n.1. (La Penna は Luzzatto とは異なる見解を示す。)

^{*18} バブリオスの後辞に関する議論については、Vaio(2001), pp.xlii-xxlvii. も参考になる。

れる形式となっている。

1.2 後辞と編者

前述の通り、〈イソップの話〉に附される後辞は、話の解釈から導き出されるものである。そのような読み方を前提とするならば、本来は後辞が存在しない〈話〉であっても、後辞の付与は可能であろう。また、後辞付きで〈話〉が提示された場合、外形的に〈話〉の読み方が明示されているといえる。そうしてみると、後辞の存在は、その〈話〉を提示する者の〈話〉の読み方、その人物の〈イソップの話〉に関する認識を、可視化するものとも考えられる^{*19}。

A 写本で後辞¹と後辞²が混在し、後辞における韻律の有無が、区別はされるものの決定的な要件ではないことにも、留意が必要である。もともと〈バブリオスの話〉は詩形のものであり、その点を評価するならば、後辞もまた詩形であることが重視されておかしくはない。実際、少なくとも近現代の校訂者たちの姿勢は、そのように見えるものである。それに対して、A 写本の姿勢は、A 写本における〈バブリオスの話〉が、必ずしもバブリオス本来の形を意識したものではないことを示している。このとき、A 写本の〈バブリオスの話〉は、あくまで〈イソップの話〉の枠の内で扱われる、イソップ集編纂のための素材であり、一種の読み替えが行われている。

さらにまた、A 写本に残る後辞が何に由来するものであるのか、評価は難しい。バブリオスがもともと後辞を附していたのか、後に附されたものか、あるいはA 写本で独自に附されたものなのか。Perry が指摘する通り、韻律の有無は、その後辞とバブリオスの関係を示すも

^{*19} もちろん、後辞が附されていない場合でも、ラ・フォンテーヌなどのように、編者が序文で読み方を説明するなどして、後辞が附されている場合と同様の認識のもとに〈話〉は提示しうる。しかし、〈話〉だけを取り出した場合、語り手の認識とは別のところで、読み手の側の〈イソップの話〉に関する認識次第で、〈話〉の性質は容易に変化するものでもある。

のではない*²⁰。たとえば、A写本で後辞²として残るものであれ、もともとバブリオスが附したものが散文化されている可能性も考えられる。この場合の後辞²は、先にバブリオスの手による後辞¹が存在しており、韻律は失われていても、バブリオスと繋がるものといえる。一方、後辞¹として残るものであっても、後世の創作である可能性も否定できない。あるいは、そうした後辞¹がさらに散文化されて後辞²として残った可能性も考えられる。これらの場合、バブリオスと本来は関わりのない後辞である。

この点で、A写本において、後辞¹と後辞²双方の附された〈話〉の存在が、興味深い。仮にバブリオスが後辞を附していたとして、二つの後辞を附したとは考えにくく、二つのうち少なくともひとつはバブリオス以外の手による創作の可能性が高いからである。また、A写本が形式の異なる後辞を二つ附していることについては、A写本が後辞¹も附す〈話〉においてV写本では後辞²しか附されない点、あるいはG写本では後辞²が見られない点などからみて、空行と同様に、A写本でとられた選択的な措置とも推測できる。こうした後辞の扱い方を鑑みると、A写本では、後辞がバブリオスに由来するものか否かは重視されていないように見える。

以上のような後辞の在り方、「区切り」や空行の存在を考慮すると、A写本における後辞の扱いは意識的と考えられるものであり、また、外形上、そこで扱う素材をすべて「〈話〉+後辞」の形式の内に落とし込もうとする意図を見て取れる。A写本そのものを対象として扱うならば、A写本は、それ自体として、一定の方針に従って〈バブリオスの話〉という素材を集めようとしたもの、とも考えられる。このとき、そのような編集を企図した者、一定の方針を持って編集した者(達)の存在が見えてくる。A写本の形式は、バブリオス本来の意図よりも、その編者の〈イソップの話〉認識と関わるものであり、編者に

*²⁰ Perry(1965), p.lxiii. n.2.

よって意識的に整えられたもの、と考えられるのではないだろうか。

1.3 本論について

A 写本は、バブリオスのイソップ集をもとに編集されたものである。しかし、ここまで述べてきたとおり、そこで示される形式は、おそらくバブリオス本来のものとは異なるものとなっている。A 写本編者の意識が反映されているともいえるが、ともすれば、それは、A 写本とバブリオスの乖離を示すものともなる。このとき、こうした相違の背景を考える手がかりは、A 写本編纂時までのバブリオスの〈イソップの話〉の受容の在り方にも見られるのではないか。A 写本の編者が、はたしてバブリオスとの相違に自覚的であったかどうかは不明であるが、既に編纂時において、バブリオスの〈イソップの話〉がそのようなものとして扱われる題材となっていた可能性も否めない。本論は、そうした点に注目しつつ、後辞の形式を足掛かりに、A 写本について評価を試みるものである。

本論では、まず〈イソップの話〉に関するバブリオスの認識を確認する。A 写本に含まれる序歌をもとに、バブリオスが示す見解を検討し、バブリオスの本来の意図を考える。つづいて、そうしたバブリオスの〈イソップの話〉の受容と展開について、実際にそれらが使用されている用例をもとに吟味し、先に確認したバブリオスの意図との異同を考察する。さらに、それと関連して、当時の〈イソップの話〉に関する認識の形成に影響があったと推測できるものとして、『修辞学初等教程』*Progymnasmata* における $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ 論に注目する。さいごに、再び A 写本について、その後辞に見られる問題を取りあげ、ここまでの議論とあわせて、後辞の在り方から考えられる A 写本の立ち位置について考察する。

一般に、〈イソップの話〉というと、「イソップ」という名のもとに、時代を超えた普遍的なものとして認識されているように思われる。一

方、私はこれまで〈イソップの話〉の受容と変質に注目して考察を進めて来た*21。すなわち、〈イソップの話〉はもともと定まったものではないという前提にたつて、どの段階で現在ある形へと変わってきたのか、その在り方を通時的・共時的に捉えなおそうというものであった。本論の A 写本に関する議論も、同様の文脈に属するものといえる。本論では、バブリオス集と A 写本の間を考えることで、これまでの研究で扱った時代をさらに進め、中世における〈バブリオスの話〉、延いては〈イソップの話〉の受容と変質の一端を明らかにできるのではないかと期する。

2 バブリオスの認識

バブリオスが〈イソップの話〉をどのようなものと認識していたのか。形式の問題上、現在残る〈バブリオスの話〉そのものから窺うことは困難であるが、A 写本には〈話〉とは別に、バブリオスの序歌が含まれており、そこにバブリオスの認識が見られる。

2.1 第 1 巻序歌

5 ἐπὶ τῆς δὲ χρυσῆς καὶ τὰ λοιπὰ τῶν ζῶων
 φωνῆν ἔναρθρον εἶχε καὶ λόγους ἦδει
 οἴους περ ἡμεῖς μυθέομεν πρὸς ἀλλήλους,
 ἄγοραὶ δὲ τούτων ἦσαν ἐν μέσαις ὕλαις.
 ἐλάλει δὲ πεύκη καὶ τὰ φύλλα τῆς δάφνης,
 10 καὶ πλωτὸς ἰχθὺς συνελάλει φίλῳ ναύτῃ.

*21 吉川 (2008), 吉川 (2010) など。2 世紀頃までの〈イソップの話〉を対象に、私たちが現在「寓話」と呼ぶ、いわゆる教訓話としての〈イソップの話〉の概念が、2 世紀前後に広まってきたものであることを論じた。一方、本論でも述べるとおり、2 世紀頃のバブリオスの見解はそれとは異なるものであり、それがファエドルスとの相違ともなる。つまり、同時代においても、一貫した認識のもとで〈イソップの話〉が扱われたわけではない。

στρουθοὶ δὲ συνετὰ πρὸς γεωργὸν ὠμίλου.
 ἐφύετ' ἐκ γῆς πάντα μηδὲν αἰτούσης,
 θνητῶν δ' ὑπῆρχε καὶ θεῶν ἑταιρείη.
 μάθοις ἄν οὕτω ταῦτ' ἔχοντα καὶ γνοίης
 15 ἐκ τοῦ σοφοῦ γέροντος ἤμιν Αἰσώπου
 μύθους φράσαντος τῆς ἐλευθέρης μούσης·

(Bab.1.prol.5-16)

(黄金時代には、人間だけでなく他の動物たちも、明瞭な声を持ち、私たちがお互いに語るような言葉を知っていて、森の中では、動物たちの集會が開かれていた。松の木と月桂樹の葉が言葉を交わし、泳ぐ魚が親しい船乗りと会話し、雀たちは農夫へはっきりと語りかけた。何ら求めずとも、大地からはあらゆるものが産み出され、死すべき者たちと神々には親交があった。世界がこのようであったことを、韻律に縛られず話を語った老賢人イソップから、学びなさい。)

第1巻序歌において、バブリオスは自らの扱う題材について説明している。つまり、バブリオスの示す〈イソップの話〉は、動物や神々あるいは人間たちが互いに言葉を交わしていた「過去」をイソップが語った話(μῦθος)、である。同時に、そのような舞台を提示することで、個々の〈話〉で動物が言葉を話す理由を示している。

このような〈イソップの話〉に関する認識は、バブリオスに新しいものではない。縁起譚など「過去の話」としての〈イソップの話〉は、アルカイック期から既に見られるのであり、バブリオスの認識はそれを踏襲するものでもある^{*22}。実際に、A写本に残る〈話〉をみても、

^{*22} Hes. *Op.*202-212; Archil. fr.172-181 West; Ar. *Av.*471-475; Arist. *Met.*356b; Call. *Iamb.*2 fr.192 Pfeiffer. など。「アルカイック期から」と記したが、ヘシオドスとアルキロソスの例については、もともとイソップへの言及はなく、後世に〈イソップの話〉と扱われることになった話であるため、注意が必要である。なお、ここに挙げたその他の用例では、イソップの名への言及がある。

神話を含め、そうした既存の「過去の話」に由来すると思われる〈話〉が多く含まれている*23。

バブリオスの認識は、1世紀前半にイソップ集を編んだファエドルスとも対照的である。ファエドルスは〈イソップの話〉の意味について、バブリオスよりも意識的であった。

Aesopus auctor quam materiam reperit,
 hanc ego polivi versibus senariis.
 duplex libelli dos est: quod risum movet,
 et quod prudenti vitam consilio monet.
 5 calumniari si quis autem voluerit,
 quod arbores loquantur, non tantum ferae,
 fictis iocari nos meminerit fabulis.

(Phaed. 1.prol.)

(作者イソップが見いだした素材を、私はセナリウス調で磨き上げました。この小さな本の効能は二つあります。ひとつは、笑いを動かすこと、もうひとつは、賢い助言で人生に教えを与えること、です。もしだれか、獣ばかりか木々も口をきいている、と行って批判したい者がいるならば、私たちが話を作って冗談を語っていることを忘れないでください。)

ファエドルスは、動物や植物が語ることを含め、明確に〈イソップの話〉を作り話とする。その目的はある種の知恵を示すことであった。このとき、ファエドルスの意図するところは、後辞（あるいは前辞*24）で示される内容であり、〈イソップの話〉はそれを婉曲的に語る

*23 Bab.9, Bab.11, Bab.12, Bab.22, Bab.28, Bab.58, Bab.59, Bab.72, Bab.86, Bab.98, Bab.103. また、Perry(1965)の推測では、アッシリアなど東方の逸話との関連が窺える〈話〉が10篇はある。

*24 〈話〉の後ろに附される「後辞」に対し、〈話〉の前に附されるものを「前辞」と呼

ための手段となる*25。別の個所では、ファエドルス自身、多数の〈イソップの話〉を創作したと自負しているが*26、それはつまり、ファエドルスが自らの知恵を誇るものでもあろう。

バブリオスが〈話〉の舞台を設定するのに対し、ファエドルスは〈話〉の意図によって説明する。この両者の認識が、両者の〈話〉の異同、あるいは同じ〈話〉における扱いの相違に繋がっているとも考えられる。

2.2 第2巻序歌

... ἀλλ' ἐγὼ νέη μουσῆ
 δίδωμι, φαλάρω χρυσέω χαλινώσας
 τὸν μυθίαμβον ὥσπερ ἵππον ὀπλίτην.
 ὑπ' ἐμοῦ δὲ πρώτου τῆς θύρης ἀνοιχθείσης
 10 εἰσῆλθον ἄλλοι, καὶ σοφωτέρης μουσῆς
 γρίφοις ὁμοίας ἐκφέρουσι ποιήσεις,
 μαθόντες οὐδὲν πλεῖον ἢ με γινώσκειν.

(Bab. 2.prol.6-12)

(けれど、この私が、黄金の額飾りを軍馬につけるように、新たな調子をイアンポスの話にまわせた。この扉を私が最初に開いたのだが、他の人々が入り込んできて、より洗練された調子の、謎かけのような詩を創り出している。しかし、かれらは私を拠り所とするほかない。)

第2巻序歌では、第1巻序歌と異なり、バブリオスは自己主張を強めている。すなわち、バブリオスの場合、〈イソップの話〉の韻文化の

ぶ。Perry(1940)の議論に従えば、後辞は前辞から発展したものである。時代を経て、前辞も後辞も同様の機能をもつものとなる。

*25 Phaed. 3.prol.33-37.

*26 Phaed. 4.prol.11-13.

手法こそ、自負する点であった。

〈イソップの話〉を韻文化する試みそのものは、言語は異なるものの、ファエドルスも同様であり、バブリオスに始まるものではない。さらに遡れば、獄中のソクラテスが〈イソップの話〉を詩に直す様子をプラトンが記してもいる*27。しかし、バブリオスが模倣者の存在を述べ、自身の優位性を主張する点を鑑みると、バブリオスの試みが同時代的に周囲の作家たちに影響を与えたことを推測できる*28。

また、バブリオスは、第2巻序歌冒頭で、〈イソップの話〉は東方起源のものであり、それを賢人イソップがギリシア人にはじめて語ったものとの認識を示す*29。こうした認識は、ファエドルスやそれまでの見解などと比較しても、バブリオスに独自のものである。

2.3 総括

バブリオスが集成を編んだであろう2世紀前後には、既に様々な〈イソップの話〉が流布していた。ファエドルス集のほか、ギリシア語散文イソップ集なども存在したと考えられる。しかしながら、2世紀頃になると、種々に見られる〈イソップの話〉は、ファエドルスのものと同様、〈話〉の意図を意識したものが多くなる。そのような状況にあって、バブリオスは、第1巻および第2巻序歌において、独自の〈イソップの話〉認識を示している。つまり、バブリオスは、自身が題材とする〈イソップの話〉に関して、改めて自身で規定しているのである。

〈イソップの話〉を自身で規定するという点はファエドルスも同

*27 Pl. *Phd.*61a-b.

*28 バブリオスとは韻律の異なる、模倣者たちによる〈話〉と目されるものについては、Crusius(1897, pp.215-248)がまとめている。しかし、バブリオスが批判の対象とした「同時代の」模倣者たちの〈話〉がどのようなものであったか、具体的には不明である。

*29 Bab. 2.*prol.*1-5.

様であるが、両者の規定は異なるものである。そして、バブリオスの場合、〈イソップの話〉を詩形で語るという表現形式こそが誇る点でもあった。このとき、バブリオスの狙いは、一般に流布していた〈イソップの話〉を独自の対象として捉え直し、ひとつの文学作品として昇華することにあつたのではないか^{*30}。そう考えるとき、あくまでも印象としてではあるが、〈話〉の解釈を示す後辞の存在は、異なる時間軸の混入となり、バブリオスの設定する世界観を阻害するように思われる^{*31}。

3 バブリオスの受容と展開

さて、以上のバブリオスの示した〈イソップの話〉は、2世紀以降、幾つか利用例が見られる。その中で、バブリオスの〈イソップの話〉はどのようなものとして受容されていたのか。本節ではその点を確認する。

なお、利用例について、バブリオスへの言及がある〈話〉の他、言及のないものも対象に含めている。後者については、それに相当する〈話〉がA写本に含まれるものを、バブリオスの〈イソップの話〉として扱う。もちろん、それらをバブリオスのものとする確証はなく、いわば「その後バブリオスのものとして語られる〈話〉」ということになる。

^{*30} バブリオスやファエドルスが〈イソップの話〉を文学の対象として独立させたとする議論は、Perry(1965, pp.xi-xii.)などにも見られる。ペリーの議論は、両者が、〈イソップの話〉を、副次的に利用される素材から独立的に提示される題材にした、というものである。

^{*31} したがって、後辞に関して、本論はLa Pennaと同様の立場である。なお、ファエドルスとバブリオスの〈イソップの話〉については、拙論(2010)でも論じている。

3.1 アウィアヌス集

アウィアヌス集は、4～5世紀頃に編まれたラテン語韻文によるイソップ集である。42篇からなり、そのうち24篇がバブリオス集に由来するものと考えられる。編者のアウィアヌスは、〈イソップの話〉について、以下のような見解を示している。

. . . huius ergo materiae ducem nobis Aesopum noveris . . .
 quas Graecis iambis Babrius repetens in duo volumina coartavit.
 Phaedrus etiam partem aliquam quinque in libellos resolvit. . . .
 habes ergo opus, quo animum oblectes, ingenium exerceas, sollicitudinem leves totumque vivendi ordinem cautus agnoscas. loqui vero arbores, feras cum hominibus genere, verbis certare volucres, animalia ridere fecimus, ut pro singulorum necessitatibus vel abipsis inanimis sententia proferatur.

(Avianus, *Epistula ad Theodosium*)

(それゆえ、この素材の第一人者として、イソップをご存じかと思えます。… それらの話をギリシアのコリアンボスでバブリオスが再び取り上げ、2巻へと縮めました。ファエドルスもまた、その一部を、5巻へと展開しました。… したがって、あなたが手にするこの作品は、あなたの心を楽しませ、頭を鍛錬し、不安を解消し、そして、人生全般について注意深く気付かせるものです。けれど、木々が話し、動物が人々とやりとりし、鳥たちが言葉で議論し、動物たちが笑うように私が設えたのは、個々の必要に応じて、生命のないものによっても見解が述べられるように考えた上のことです。)

アウィアヌスの見解において、〈イソップの話〉を集めた存在として、ファエドルスとバブリオスに区別はない。両者はそれらを巧みに

集めた作家の代表である。また、アウティアヌスの〈イソップの話〉に関する発想は、バブリオスよりもファエドルスに近い。アウティアヌスが両者を同等に扱うということは、つまり、アウティアヌスが自身の〈イソップの話〉に関する認識に基づき、バブリオスとファエドルスの〈イソップの話〉を同一視していることになる。

アウティアヌス集は、バブリオスの名を挙げ、その〈話〉を参照しつつも、しかし発想としてはバブリオスとは異なる認識のもとで〈イソップの話〉を扱い、あるいはそれらを再生産しているのである。

3.2 ユリアヌス帝

ユリアヌス帝による 362 年のニルスへの書簡中に、バブリオスへの言及がみられる。

Ἦ τοῦτο νομίζεις ὑπὲρ τῶν παλαιῶν ἀμαρτημάτων ἀπολογεῖσθαι πρὸς ἅπαντας, καὶ τῆς πάλαι ποτὲ μαλακίας παραπέτασμα τὴν νῦν ἀνδρείαν εἶναί σοι; τὸν μῦθον ἀκήκοας τὸν Βαβρίου «γαλῆ ποτ' ἀνδρὸς εὐπρεποῦς ἐρασθεῖσα»· τὰ δὲ ἄλλα ἐκ τοῦ βιβλίου μάνθανε.

(Iul., Ep. 50 Wright)

(あるいは、君は、かつての誤りに関して、皆にたいして弁解し、今の君の勇敢さがかつての気弱さを覆い隠すものだと考えているのか？
バブリオスのこの話を聞いたことがあろう。「あるとき、美男子に恋したイタチが」と。話の残りは本から学びなさい。)

ここで挙げられている〈話〉は、Bab.32「イタチとアフロディテ」と考えられる。

Γαλῆ ποτ' ἀνδρὸς εὐπρεποῦς ἐρασθείση
δίδωσι σεμνὴ Κύπρις, ἢ πόθων μήτηρ,

μορφὴν ἀμειψαὶ καὶ λαβεῖν γυναικείην,
καλῆς γυναικός, ἧς τίς οὐκ ἔχειν ἦρα;

(あるとき、美男子に恋したイタチに、欲望の母、尊いキュプリスが、イタチの姿から女性の姿になることを許した。誰もが愛さずにはいられない、美しい女性の姿であった。)

ここに引用したのは Bab.32 の冒頭であるが、その後、美しい女性に姿を変えたイタチは、目の前を走りすぎたネズミを追いかけて正体が露呈してしまう。ユリアヌスは〈話〉の1行目のみ、与格を主格に変えて提示する。その上で、「本性は変わらない」「取り繕っても何かのきっかけで露見する」といった意味を示す。ユリアヌスの用法において、この意味こそ目的であり、〈話〉の全体は不要となる。

ユリアヌスにとっては、一行目だけで通じるほどに自明な〈話〉であったということであり、それを読む手段が身近にあったということであろう。しかし、1行目のみを挙げ、〈話〉から導かれる意味を主目的とする用法は、表現を自負するバブリオスの意図と離れてそれらの〈話〉が読まれていたことを示唆するものである^{*32}。

3.3 Tabulae Ceratae Assendelftinae

バブリオスの名は言及されないものの、バブリオスの〈話〉との関連を推測できるものとして、パルミュラ出土の7枚の蠟板がある。発見者に因んでアッセンデルフト蠟板と呼ばれるが、これらには3世紀頃にパルミュラの学童によって記されたと考えられる〈話〉が13篇残り、そのうち8篇にA写本に含まれる〈話〉との関係を窺える

^{*32} なお、バブリオスへの言及はないものの、ユリアヌスは *Ep.68 Wright* において「ライオンとネズミ」の話 (Bab.107) に触れている。そこでは「力の劣るものが役立つことがある」という意味を前提としており、〈話〉の用法は「イタチとアフロディテ」の例と同様である。

(Bab.43; Bab.78; Bab.91; Bab.97; Bab.103; Bab.117; Bab.121; Bab.123。ただし、Bab.123 は、A 写本では 1 行目を残して散逸しているため、実質 7 篇である)*³³。

それらのうち、Bab.43 との関連が考えられる話では後辞も記される。A 写本では後辞¹ が附されており*³⁴、蠟板のものはそれと類似するため、既にこの時期に後辞付きの〈話〉が存在し、それが後世に引き継がれたと考えられる。なお、蠟板の残り 12 篇では、A 写本とは関連のない 1 篇に後辞が見られるのみである。

アッセンデルフト蠟板は、〈バブリオスの話〉が教育の場で用いられていたことを示している。後辞付きの話もあり、既にそういうものとして、すなわち後辞を読み取るべき話として〈バブリオスの話〉を学ぶ環境が出来ていたことを示す一つの事例といえる。

3.4 P. Oxy. X 1249

3 世紀前後のパピルス断片に、A 写本と対応する 4 篇から、16 行含まれている (Bab.25; Bab.43; Bab.110; Bab.118)*³⁵。断片では、Bab.43 の後辞 (19 行目) と対応するとみられる部分が一行目にあり、続いて Bab.110、Bab.118、Bab.25 (1 行目) の順に残る。

Bab.43 「水辺のシカ」は、脚を疎ましく、角を自慢に思っていた鹿が、その角が原因で捕まってしまうもので、シカの思い違いと後悔を語る話である。Bab.110 「イヌと飼い主」は、旅に出る男が飼い犬に準備を促すと、犬が準備はもう済んでいると答えるもの。犬が飼い主の思い違いを指摘する。Bab.118 「ツバメと大蛇」は、安全な場所と考えて巣を作ったツバメが、雛をすべて蛇に食べられてしまう話。親ツバメの思い違いと後悔が示されている。Bab.25 「ノウサギとカエル」

*³³ Luzzatto&La Penna(1986), p.XXX.

*³⁴ ただし、前述の通り、右側に区切り記号がなく、行頭が一字左に出されて本文と区別される形式である。

*³⁵ Luzzatto&La Penna(1986), p.XXXI.

は、自分たちが最弱であると考えたノウサギが生きるのをやめようと決心するが、さらに弱いカエルたちの姿をみて、それを思いとどまる話。ノウサギたちの思い違いを語るものといえる。

断片に残る話の内容は、それぞれ何かしらの「思い違い」に関わるものと読めるものであり、あるいは、これらがそうした内容に即して抜粋されたものとも推測できる。すなわち、〈バブリオスの話〉が〈話〉の意図を前提とする対象として扱われていたことを示すものと考えられる。

また、それぞれ ϵ , μ , ξ , γ で始まる話であり、A 写本と異なりアルファベット順の配置となっていない点も、注意が必要である。

3.5 P. Amherst II 26

3~4世紀頃のパピルスに残る話もまた、バブリオスの名は言及されないものの、バブリオスの受容を考える上で興味深い (Bab.11; Bab.16; Bab.17 に相当)*³⁶。パピルスの Bab.11 および Bab.16 に相当する話はラテン語とギリシア語双方で記される。A 写本の Bab.11 は後辞¹が附されており、パピルスでは後辞の部分がラテン語でのみ残る。なお、パピルスのその他2篇に後辞はなく、A 写本の対応する話では後辞²が附されている。

χρῆ πρᾶον εἶναι μηδ' ἄμετρα θυμοῦσθαι.
ἔστι τις ὀργῆς νέμεσις, ἦν φυλαττοίμην,
αὐτοῖς βλάβην φέρουσα τοῖς δυσοργήτοις.

(Bab.11.10-12)

oportet ergo serенаe magis aut inaequa irasci,
est quidam ira ultricis quem custodiamus

*³⁶ Luzzatto&La Penna(1986), p.XXXI.

ipsismet ipsis nocentiam ferentes animosali[bus

(P. Amherst II 26)

これは Bab.11 の後辞¹とそれに対応するラテン語部であるが、ほぼ逐語的な翻訳であることが見受けられる。パピルス上の他の部分に関しても、巧拙は別として、同様の傾向にある*37。バブリオスの〈話〉とラテン語の繋がりにはアウイアヌスでも見られるが、こちらの方がより直接的である。こうした翻訳が作られ利用された具体的な状況は、この断片だけでは不明であるものの、後辞がラテン語でも残る点は、それを要する読み方がされたことを示唆する。

なお、ここに残る3篇がいずれも α で始まる話である点も興味深い。配置順は A 写本でいう Bab.17、Bab.16、Bab.11 となっており、A 写本とは一致しないが、アルファベット順を意識して再配置したのであれば、発想としては、A 写本に通ずるものがみえる。

3.6 『スーダ』

10世紀末の『スーダ』のバブリオスの項目は、以下のように記される。

〈Βαβρίας ἢ Βάβριος〉 Μύθους ἤτοι Μυθιάμβους. εἰσὶ γὰρ διὰ χωλιάμβων ἐν βιβλίῳς ἰ'. οὗτος ἐκ τῶν Αἰσωπειῶν μύθων μετέβαλεν ἀπὸ τῆς αὐτῶν λογοποιΐας εἰς ἔμμετρα, ἧγουν τοὺς χωλιάμβους.
(Suda, β 7 Adler)

〈バブリアスあるいはバブリオス〉 ミュートスあるいはミュティアンボスを作った。それらはコリアンボスで10巻に残る。彼は、イソッ

*37 Grenfell&Hunt(1901), p.26.: The Latin version, which in each case precedes the Greek, is extraordinarily bad, giving the impression of having been composed by a person who knew very little Latin, and copied by another who knew less.

プの話に由来する話を、散文から詩形へ、すなわちコリアンボス詩へと転じた。)

『スーダ』の説明において、バブリオスは〈イソップの話〉を詩形に転じた人物である。しかし、この時代にあっては、バブリオスの主張した模倣者たちの〈話〉や、後世の創作が流布していたとして、それらとバブリオスの〈話〉を識別することが可能であったかどうか。むしろ、コリアンボス詩形を持つ〈イソップの話〉であれば、バブリオスの名のもとに認識されたことも考えられる。なお、ここでコリンボス詩形の集成が10巻存在したことが語られるが、バブリオスとの具体的な関係は不明である*38。

また、『スーダ』の $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ の項目を確認してみると、

($\tilde{M}\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$;) $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ $\psi\epsilon\upsilon\delta\acute{\eta}\varsigma$, $\epsilon\acute{\iota}\kappa\omicron\nu\acute{\iota}\zeta\omega\nu$ $\tau\eta\nu$ $\acute{\alpha}\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha\nu$.

(*Suda*, μ . 1389 Adler)

(〈ミュートス〉 真実を映した、偽りの話)

と記載されている。作り話でありつつ「真実」を含むとする認識は、それを読み解くための解釈を必要とするものである。すなわち、後辞が附されて自然なものといえる。

3.7 総括

それぞれの用法において、バブリオスの〈イソップの話〉は、同時代的に一定の機能をもった〈話〉として使用されている。また、〈イソップの話〉認識に関しては、バブリオスの示した独自の考えは引き継がれていない。これらの用例をふまえると、バブリオスの〈イソッ

*38 Luzzatto&La Penna(1986, pp.XL-XLI)を参照すると、『スーダ』には「バブリオス」の説明だけでなく、その〈イソップの話〉の痕跡が多数含まれることも窺える。

プの話〉は、バブリオスの「作品」として受容されたというよりも、あくまでも詩形の〈イソップの話〉の一種として認知されていた、と考えられる。詩形であることを別にすれば、バブリオスの名よりも〈イソップの話〉であることが先立つのである。一方、既に見たとおり、バブリオスの自負は詩形で語ることにあった。その点では、バブリオスの試みの結果が、〈イソップの話〉の形式として、少なくとも10世紀頃まで価値を保っていたということもできる。

こうしてみると、A写本の形式もまた、バブリオスの「作品」を残すものというよりも、このような受容の流れの延長線上に置きうるものである。その中で、『スーダ』に見られる説明は、10世紀当時の〈イソップの話〉認識を表すものであるが、後辞を必須とするA写本の形式をふまえると、『スーダ』とほぼ同時代のA写本も、同様の認識のもとに纏められたものではないかと考えられる。

4 『修辞学初等教程』における μῦθος

ところで、『スーダ』における〈イソップの話〉の説明は、『修辞学初等教程』*Progymnasmata*の文言を受け継ぐものであり、独自の認識を示すものではない。また、後辞に関しても、『修辞学初等教程』において論じられている。後辞の存在と〈イソップの話〉の読み方は不可分と思われるが、本節では『修辞学初等教程』に着目して、〈イソップの話〉認識と後辞の在り方について確認する。

4.1 テオン

1世紀末のテオンは、『修辞学初等教程』において、μῦθοςについて以下のように説明する。

Μῦθος ἐστὶ λόγος ψευδῆς εἰκονίζων ἀλήθειαν. Εἰδέναι δὲ χρὴ, ὅτι μὴ περὶ παντὸς μύθου τὰ νῦν ἢ σκέψεις ἐστίν,

ἀλλ' οἷς μετὰ τὴν ἔκθεσιν ἐπιλέγομεν τὸν λόγον, ὅτου εἰκῶν ἔστιν ἔσθ' ὅτε μέντοι τὸν λόγον εἰπόντες ἐπεισφέρομεν τοὺς μύθους. . . . ἔαν δὲ μηδεμίᾳ ὑπάρχη προσθήκη σημαίνουσα τὸ γένος, κοινοτέρως τὸν τοιοῦτον Αἰσώπειον καλοῦμεν. . . . Αἰσώπειοι δὲ ὀνομάζονται ὡς ἐπίπαν, . . . ὅτι Αἴσωπος αὐτοῖς μᾶλλον κατακόρως καὶ δεξιῶς ἐχρήσατο·

(Theon, *Prog.*72-73 Spengel)

(ミュートスは、真実を映す偽りの話である。知っておくべきこととして、ここで今検討するのは、全てのミュートスに関してではなく、話の提示のあとに、それにふさわしい説明を語ることができるものである。説明を語ったのちに、ミュートスを示す場合もある。…話の種類を示す付記がない場合でも、一般にこの種の話をつい「イソップの話」と呼ぶ。…全体として「イソップの話」と名付けられているのは、…イソップがそれらの話を数多く、巧みに利用したからである。)

テオンが対象とする *μῦθος* は、すべての *μῦθος* ではない。対象とするのは、〈話〉の背後に何かしらの「真実」を読み取るべきものであり、それらの〈話〉の後あるいは前に、説明を附しうるものである。そして、その種の *μῦθος* を「イソップの話」と呼ぶという。

ここで、「イソップの話」そのものは、あくまで「作り話」である。しかし、「真実に似せた作り話」ではない。それは偽りであることを気付かせない作り話であり、背後に対応する「真実」はない。それに対して、「イソップの話」の場合、真・偽の二重性が要点となる。外見上は「作り話」であることが明確でありながら、その背後に「真実」が想定されるのである。いわば具体的な文脈を欠いた喩え話といえるが、このとき、「イソップの話」の使用者は、そうした「真実」を意識する必要がある。

テオンが示す〈イソップの話〉を用いた練習は、その「真実」を意識したものといえる。

Καὶ πολλαπλοῦν ἔστι καὶ τοῦτο τὸ γύμνασμα· καὶ γὰρ ἀπαγγέλλομεν τὸν μῦθον καὶ κλίνομεν καὶ συμπλέκομεν αὐτὸν διηγήματι, καὶ ἐπεκτείνομεν καὶ συστέλλομεν, ἔστι δὲ καὶ ἐπιλέγειν αὐτῷ τινὰ λόγον, καὶ αὖ λόγου τινὸς προτεθέντος, μῦθον ἑοικότα αὐτῷ συμπλάσασθαι. Ἔτι δὲ πρὸς τούτοις ἀνασκευάζομεν καὶ κατασκευάζομεν.

(Theon, *Prog.*74 Spengel)

(以下の通り、練習は多様である。ミュートスを語る、ミュートスの語形を変える、ミュートスを逸話の中に編みこむ、ミュートスを拡張する、ミュートスを縮める。また、ミュートスに何か説明を語ることもでき、その一方で、何らかの説明を語ってから、それにふさわしいミュートスを創り出すこともできる。さらに、ミュートスについて、否定的に論じたり、肯定的に論じたりする。)

Ἐπιλέγειν δὲ ἔστιν ὧδε, ὅταν μύθου ῥηθέντος ἑοικότα τινὰ γνωμικὸν αὐτῷ λόγον ἐπιχειρῶμεν κομίζειν,
Γένοιντο δ' ἂν καὶ ἐνὸς μύθου πλείονες ἐπίλογοι, ἐξ ἑκάστου τῶν ἐν τῷ μύθῳ πραγμάτων τὰς ἀφορμὰς ἡμῶν λαμβανόντων, καὶ ἀνάπαλιν ἐνὸς ἐπιλόγου πάμπολλοι μῦθοι ἀπεικασμένοι αὐτῷ.

(Theon, *Prog.*75 Spengel)

(以下のように、説明を後付けすることができる。すなわち、ミュートスが語られたあと、それにふさわしい何か格言的な説明を附そうと試みる。... その内容に起点をとれば、ひとつのミュートスに複数の説明が附されうるし、また、その一方で、一つの説明に対して多数のミュートスが示されうる。)

いわゆる作文練習だけではなく、〈イソップの話〉を提示した後に「説明」を附す練習、あるいは、「説明」に合わせて〈イソップの話〉を語る練習も挙げられる。ここでの「説明」は、一種の格言的な、一般化された文言が考えられる*39。しかるに、一つの〈話〉に対して複数の「説明」あるいは一つの「説明」に対して複数の〈イソップの話〉を合わせる練習が興味深い。

〈イソップの話〉に附される「説明」は、話に対応する「真実」を説明するものである。しかし、ひとつの話に対して複数の「説明」が附されるとするならば、その〈イソップの話〉に想定される「真実」は絶対的なものではなく、使用者の解釈次第で創り出されるものとなる。また、「説明」に合わせて〈イソップの話〉を語る練習は、〈イソップの話〉も固定的なものではないことを示す。テオンの練習においては、〈イソップの話〉の本体も「説明」も、柔軟に生み出されるものであり、使用者によって動的に構成されるものである。

テオンは、「説明」に合わせて〈イソップの話〉を構成するための用意として、既存のものであれ自作のものであれ、〈話〉の蓄えを持っておくことを勧めている*40。既存の〈イソップの話〉も、ただそのものとして使用されるだけでなく、新しい〈イソップの話〉を生み出す素材となり、容易に改変や創作の土台となるのである。

4.2 アプトニオス

中世以降、いわば標準的な教科書として広く普及した、4世紀のアプトニオス版『修辞学初等教程』では、以下のように〈イソップの話〉が説明されている。

Ὁ μῦθος ποιητῶν μὲν προῆλθε, γεγένηται δὲ καὶ ῥητόρων κοινὸς ἐκ παλαιέσεως. Ἔστι δὲ μῦθος λόγος ψευδῆς ε-

*39 Theon, *Prog.*75 Spengel. テオンは「肉を運ぶ犬」の話をもとに具体例を示す。

*40 Theon, *Prog.*76 Spengel.

ἰκονίζων ἀλήθειαν. . . νικᾷ δὲ μᾶλλον Αἰσώπειος λέγεσθαι τῷ τὸν Αἰσώπον ἄριστα πάντων συγγράφαι τοὺς μύθους. . . Τὴν δὲ παραίνεσιν, δι' ἣν ὁ μῦθος τέτακται, προτάττων μὲν ὀνομάσεις προμύθιον, ἐπιμύθιον δὲ τελευταῖον ἐπενεγκών.

(Aphthonius, *Prog.*1-2 Rabe)

(ミュートスは、詩人たちから発したものであるが、弁論家たちにも助言のために一般的なものとなっている。ミュートスは、真実を映す偽りの話である。... 〈イソップの話〉と言われることがむしろ普及しているのは、イソップが、他の者に比べてミュートスをもっとも立派に記したことによる。... ミュートスが意図する助言を、前に附した場合は前辞、後ろに附した場合は後辞と呼ぶことにしよう。)

〈イソップの話〉を説明するアプトニオスの文言では、テオンの示したものが受け継がれている。しかし、テオンの説明において〈イソップの話〉が条件付き *μῦθος* であったのに対して、アプトニオスにおいてはそうした条件がなくなり、*μῦθος* = 〈イソップの話〉という図式が成立する。また、アプトニオスの説明では、*προμύθιον* や *ἐπιμύθιον* といった語彙も規定され、〈イソップの話〉における「前辞」「後辞」の存在が明確化する。そこで示されるのは、*παραίνεσις* すなわちある種の助言を意識したものであり、解釈を前提とするものである。

アプトニオスの議論は、〈イソップの話〉の概要をテオンに比べて簡潔に示す。その一方で、簡潔であるがゆえに、〈イソップの話〉を明確に規定する。そして、学習者に対して、〈イソップの話〉はそのような読み方をする話という認識を根付かせるものとなる。アプトニオスの『修辞学初等教程』が中世以降の標準的教科書であったことを考慮すると、その議論の中で *μῦθος* が〈イソップの話〉として説明され規定された意味は大きいと思われる。

4.3 総括

『修辞学初等教程』は、教育課程の早期に用いられた教科書であり、その中でも〈イソップの話〉を示す $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ は、ほぼ冒頭に置かれる項目であった。そのため、多少なり教育を受けた人物であれば、およそ『修辞学初等教程』における $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ を目にしていただとしても不思議ではない。とすれば、『修辞学初等教程』における $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ の在り方が、そうした人々の〈イソップの話〉認識の形成に影響した可能性も高い。

アプトニオスの説明に沿えば、〈イソップの話〉は後辞ないし前辞が附されるものである。そして、もともと後辞が附されていない話であっても、〈イソップの話〉であれば、附しうるものとして読まれることになる。さらには、そのように読みうる話は、本来別のものであっても、〈イソップの話〉の枠組みに含まれる可能性を帯びる。テオンが練習で示した点も含めると、〈イソップの話〉は固定的なものではなく、後辞も含めて、容易に改変創作可能な対象である。

こうした『修辞学初等教程』の影響を、具体的に測ることは難しい。しかし、たとえばバブリオスの用例が教育的文脈の中に見られることは、それと関わるものではないかと考えられる。もちろん、『スーダ』における $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ の説明も、『修辞学初等教程』の影響を示す一例といえる。『スーダ』の説明は、『修辞学初等教程』の $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ 認識を、教育的な文脈から切り離して、一般的な説明として示している。これは、『修辞学初等教程』の $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ の説明が、時代を超え、教育の枠組みを超えて、広く〈イソップの話〉の認識に関わるものとなっていたことを示唆するものである^{*41}。

^{*41} 『修辞学初等教程』の伝承については、堀尾(2006)にまとめられている。中世以降の『修辞学初等教程』の展開を考えると、その冒頭に $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が置かれた意義は一層大きなものと思われる。

5 アトス写本後辞と編者の方針

中世までに普及したギリシア語散文イソップ集では、基本的に後辞が附されている^{*42}。そのような〈イソップの話〉の在り方は、『修辞学初等教程』や『スーダ』に見られる〈イソップの話〉とも共通のものである。〈イソップの話〉に関する発想として、後辞を附すべきもの、あるいはそのように読むべきものとみる認識が前提となる。ここまで確認した用例も考慮にいれると、A写本編纂の時点において、〈バブリオスの話〉もまた、後辞を附すべき〈イソップの話〉の一種として広く受け入れられていた可能性は高い。そうであれば、〈バブリオスの話〉への後辞の附与は、A写本における独自の発想というわけではなく、むしろそれまでの〈イソップの話〉の受容の流れを引き継ぐものといえるだろう。このとき、バブリオスの作品としてよりも〈イソップの話〉としての評価が先立つとすれば、表現形式より内容解釈が問題となり、それを示す後辞の韻律の有無は二の次となる。

A写本の独自性は、すべての話に後辞を想定している点に見ることができる。空行を残していることを考えると、明らかに意図的なものであるが、その後辞の扱いについて、A写本には考慮すべき点も残る。

5.1 語彙の問題

ひとつは、後辞において用いられる語彙の問題である。バブリオスの序歌において、〈イソップの話〉を示す語彙には $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が用いられるが、A写本の後辞において〈イソップの話〉を示す語彙を確認すると、後辞¹では $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が7篇、 $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ が2篇で、後辞²では $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ が32篇、 $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ が12篇で用いられている。序歌での使用は $\mu\tilde{\upsilon}\theta\omicron\varsigma$ で統

^{*42} Hausrath(1957)。中世以降普及したラテン語版のイソップ集 (Romulus 集) においても、ひろく前辞や後辞が附される。Oesterley(1870), Hervieux(1894) 参照。

一されるのに対し、A 写本の内部では一貫性が保たれていない。

たとえば、中世までに普及したギリシア語散文イソップ集は、大きく (I) Augustana (II) Vindobonensis (III) Accursiana の 3 種に分けられ、それぞれの祖本は (I) 2 世紀頃 (II) 6 世紀頃 (III) 9 世紀頃のものとして推測されるが^{*43}、これらの後辞における語彙の使用を確認すると、(I) では *λόγος*、(II) (III) では *μῦθος* が用いられている。あるいはまた、バブリオス系イソップ集を散文化したと考えられる集成も残るが、そこでは *μῦθος* が使用される^{*44}。これらの集成ごとの語彙の相違はそれぞれの祖本の成立時期の相違とも関係があるように思われるが、それぞれの集成における使用語彙の一貫性は、集成編纂時に整えられたものと考えられる^{*45}。

それに対して、A 写本の場合、編者が語彙の統一を図っていないのである。

5.2 区切りの問題

前述のとおり、A 写本の編者は後辞を判別できる形で記した。A 写本では、後辞² は字体が変えられるため明白であるが、後辞¹ は本文と同じ字体であるため、区切り記号の有無が、区別を判別する主要な手がかりとなる。そうして確認してみると、校訂本においては後辞¹ として区別されるものの、A 写本では区別されていない話が 6 篇存在する (Bab.36; Bab.37; Bab.38; Bab.65; Bab.116; Bab.119)^{*46}。

^{*43} Hausrath(1957), pp.VI-XXV.

^{*44} 15 世紀頃の写本 (Codex Bodleianus Auct. F. 4.7.) および 14 世紀前半の写本 (Codex Vaticanus Palatinus Graecus 367) に残る。前者では後辞でなく前辞が用いられている。cf. Luzzatto&La Penna(1986), pp. XXXIII-XXXVIII.; Knoell(1877).

^{*45} なお、古代における〈イソップの話〉を表す語彙については、van Dijk(1997, pp.79-97) に詳しい。

^{*46} Luzzatto&La Penna(1986) はこれらすべてを本文に含め、後辞¹ としつつ、いずれも削除対象としない。Perry(1965) は、Bab.37 と Bab.119 の後辞¹ を削除対象とし、残り 4 篇のものは削除しない。Boissonade(1844) では、例外的に全体として後辞¹

それらで示される「後辞」の導入は以下の通りである。

36. κάλαμος μὲν οὕτως ὁ δὲ γε μῦθος ἐμφαίνει
 37. ἔργους ἔπαινος ἄργία δὲ κίνδύνοις.
 38. ὁ μῦθος δ' ἡμῖν τοῦτο πᾶσι μὲν,
 65. θαυμαστός εἶναι σὺν τρίβωνι βουλοίμην
 116. τοῦτι μὲν οὕτως ἔμφασις δὲ τοῦ μύθου
 119. καὶ τοὺς θεοὺς Αἴσωπος ἐμπλέκει μύθοις,

また、これらの話では、後辞²が附される Bab.37 を除いて、後ろに空行が置かれている^{*47}。

Bab.65 は、「ツルとクジャク」の話であり、豪華な羽を自慢するクジャクと、みすばらしいものの天高く飛べることを誇るツルとの諍いを描いている。話の文脈からすると、Bab.65 で後辞とされるものは、内部の発言と解しても通用するものであり、もともと後辞として区別されていなかった可能性も考えられる。しかし、この話は散文のものも残っており、そこでは当該部分が **ὄτι** で始まる後辞として示される^{*48}。

Bab.36 と Bab.116 の「後辞」は同様の形式である。これらは前段を

を区別しないが（ただし、対訳で付されたラテン語では後辞¹は字下げされて区別されている）、これら 6 篇については、Bab.37 の後辞¹を無視して後辞²のみ記載する他は、すべて本文に含まれる。また、Lachmann(1845) は Bab.37 の後辞¹を無視して後辞²のみ註記する他は、すべて本文に含めて削除しない。Lewis(1846) は、Bab.37 の後辞¹を無視する他、Bab.38 の後辞¹を削除対象とし、残りはすべて本文に含めて削除しない。Rutherford(1883) はすべてを後辞¹として本文と区別し註記する。なお、Crusius(1897) はすべての後辞を削除対象とする。校訂者によって対応は様々だが、基本的にこれらを後辞¹として識別する点は共通である。

^{*47} Bab.37 については、Boissonade(1844), Lachmann(1845), Lewis(1846) で、註記もされずに共通して無視されている。Boissonade(1844) が基本的に後辞¹を削除対象とせず全て記載していることを考えても、Bab.37 の後辞¹に対するこうした扱いは気になる点ではあるが、明確な理由は不明である。この点に関しては、同時代の他の刊行本を含め、さらに精査する必要があるであろう。

^{*48} Bab.249 Hausrath. なお、Perry(1952) は散文版を含まず Bab.65 を採っている。

引き継ぐ形の導入であるため、連続するようにも受け取れるが、直後の〈話〉の解釈を示そうとする文言を考えると、その他の後辞¹と比較してこれらを区別しない理由はない。

Bab.38の「後辞」はBab.96の後辞¹とほぼ同じ字句である^{*49}。しかしBab.96では後辞¹として区別される一方、Bab.38では区別されない。Bab.119ではイソップに言及され、他と比較しても、形式的として本文と繋がるものではない。また、バブリオスの序歌に従えば、その〈イソップの話〉において神々が登場することは織り込み済みであり、こうした説明は不要なものである。

これらの事例において、A写本の編者は、容易に後辞¹として区別可能なものを、区別せずに記したということになる。後辞²の附されるBab.37を除いて、後ろに空行が置かれていることは、編者がこれらに区切りを付け忘れたということではなく、後辞を必須と意識しつつ、これらを後辞¹として識別していなかったことを示すものである。

5.3 総括

A写本の参照元がどのようなものであったか、現状では確認することはできない。しかし、語彙の問題や区切りの在り方、後辞¹と後辞²が双方附される話の存在などを考えると、A写本には複数の参照元があったとみて問題はなさそうである。

A写本が語彙を $\mu\theta\omicron\varsigma$ に統一していない理由は不明であるが、区切りの問題と合わせて考慮すると、むしろ編者がさほど字句にまで介入せず、参照元をそのまま残しているものと推測される。また、後辞を必須とする意識を持ちつつ、明らかに「後辞」と区別可能なものを区別せずに残していることなどは、編者が形式を意識しながらも、〈話〉に対する独自の判断を避けているようにも考えられる。

また、この点は、A写本において、参照元の存在しない独自の後辞

^{*49} Bab.96 後辞¹の導入は $\acute{o}\ \mu\theta\omicron\varsigma\ \acute{o}\rho\theta\acute{\omega}\varsigma\ \pi\acute{\alpha}\sigma\iota\ \tau\omicron\upsilon\tau\omicron\ \mu\eta\gamma\acute{\nu}\epsilon\iota$ である。

が創り出されたかどうかという問題にも関わる。既に確認した〈イソップの話〉の議論の中で、後辞は容易に創り出されるものであり、A写本でもその可能性は否定できない。A写本が独自に後辞を創り出していたとすれば、参照元を想定したとしても、参照元との関係が不明瞭になってしまうのである。とはいえ、もしA写本の編者が積極的に後辞を創り出していたとすれば、18篇も後辞を附さないままに残すことは考えにくい。確実な答えは出ないものの、空行の存在を考えると、少なくともA写本は、後辞を積極的に創り出すものではなかったと思われる*50。

A写本には、バブリオスの序歌が含まれるため、それがバブリオス集を意識したものであることは明らかである。しかし、後辞の扱いに見られるA写本の姿勢は、バブリオスの序歌に見られる意図から離れたものである。後辞の在り方を鑑みると、A写本については、バブリオスの作品をただまとめるというよりも、それまでの受容の流れを背景に、参照可能な〈バブリオスの話〉を、後辞を附すべき〈イソップの話〉として総合的に纏めようと試みたもの、と考えられる。A写本は、〈バブリオスの話〉を素材としつつ、そこに空行を含めて後辞を附す形式を徹底したため、結果的に、バブリオスの意図とは異なる新たなイソップ集を生み出すことになった、と評価できるのである。

Perryは、ギリシア語散文イソップ集が主に一種の手引きとして評価されるなか、それらの編者たちが、独自に体裁を整えることで自身の集成に付加価値を付けようとしていたことに触れている*51。A写本

*50 後辞²については、Luzzatto&La Penna(1986, pp.XCVI-XCVII)が様々な引用元の存在を推測しており、本来はバブリオスとは無縁の場所からも後辞²の選定が行われた可能性が考えられる。ただし、この場合は、A写本において独自に後辞を創り出したということではなく、〈話〉に合わせて独自に後辞を選び出した、ということである。とはいえ、選び出す形であるにしても、後辞を附すべきと考える発想は、当時の〈イソップの話〉に関する認識を反映したものであろう。

*51 Perry(1965), p.xi. しかし、そうした集成編者の試みは、素材の性質ゆえか、評価され難いものである。

の場合、〈バブリオスの話〉という素材が際立ってしまうものの、ここまで見てきたA写本や〈バブリオスの話〉の在り方を考慮すると、A写本もまた、散文イソップ集と同種の試みを行うものであったとみることも可能ではないだろうか*52。

6 おわりに

本論は、後辞を附すというA写本の形式をもとに議論を進めたものであり、個々の〈バブリオスの話〉やそこに含まれる後辞の真偽について明らかにしようとするものではない。むしろ、A写本以外にまとまった資料のない現状や、〈イソップの話〉の性質上、真偽の判断は困難であろうと考える。とはいえ、後辞を除外して〈話〉だけをみる場合、A写本のみに見られる題材も多く、素材としては、バブリオスに由来するものが多数含まれている可能性は高い。その中で、後辞を附す形式は、同じ〈話〉であっても、それを扱う精神が時代に伴って変質していることを示している。見た目が同じでも、内実が異なるのである。

A写本が10世紀頃までの〈バブリオスの話〉を吸い上げたものとみると、A写本は、その当時までのバブリオス受容が結実したものであり、内実の変質した〈バブリオスの話〉を纏めたものといえる。つまり、それ自体ひとつの独立したイソップ集として評価しうるものであり、本来のバブリオス集から乖離したものである。翻って、近現代の校訂本をみると、A写本は「バブリオス集」再建のための主要な材料であり、後辞の有無は校訂者の判断に委ねられる。そうした判断

*52 バブリオス集が、文学的題材として〈イソップの話〉を扱い、その韻文化を誇るものであったとしても、A写本が必ずしもその精神を引き継いでいるわけではない。A写本では、教訓を読むべき〈イソップの話〉としての扱い方が問題であり、後辞が散文か韻文かという点までは、重要な要素となっていない。とはいえ、それまでのバブリオス受容の在り方を鑑みるに、A写本の編者はそうしたバブリオス集からの乖離に自覚的ではなかったものと推察する。

はA写本の意図をさらに上書きするものであるが、しかし、その判断が一致せず、校訂者によって異なる形式が生み出される状況は、見方を変えると、A写本を素材としてそれぞれの校訂者が新しい「バブリオス集」を創り出しているといえるのではないか、と思われる。

参考文献

- Adler, A., *Suidae lexicon*, I-IV, Leipzig, 1928-1935 (repr. 1967-1971).
- Adrados, F. R. (1999) *History of the Graeco-Latin fable I: Introduction and from the origins to the Hellenistic age*: Brill. (trans. by Leslie A. Ray).
- Bidez, J. (1960) *L'empereur Julien. Oeuvres complètes*, Paris.
- Boissonnade, J. F. (1844) *BABPIOY MYΘIAMBOI*, Paris.
- Crusius, O. (1897) *Babrii Fabulae Aesopeae*, Leipzig.
- Dijk, G.-J. van (1997) *AINOI, AOGOI, MYΘOI: Fables in Archaic, Classical, and Hellenistic Greek Literature. With a Study of the Theory and Terminology of the Genre.*, Leiden.
- Duff, J. W. and Duff, A. M. (1935) *Minor Latin Poets*, II, LCL 434, Cambridge.
- Grenfell, B.P. and Hunt, A.S. (1901) *The Amherst Papyri*, II, London.
- Hausrath, A. *Corpus Fabularum Aesopicarum*, I-II, Leipzig, 1957-1959.
- Hervieux, L. (1894) *Les Fabulistes Latins: depuis le siècle d'Auguste jusqu'à la fin du moyen âge*, II, Paris.
- Knoell, P. (1877) *Fabularum Babrianarum paraphrasis Bodleiana*, Vienna.
- Lachmann, C. (1845) *Babrii Fabulae Aesopeae*, Berlin.
- Lewis, G. C. (1846) *Babrii Fabulae Aesopeae*, London.
- Luzzatto, M. J. and La Penna, A. (1986) *Babrii Mythiambi Aesopei*, Leipzig.

- Oesterley, H. (1870) *Romulus: die Paraphrasen des Phaedrus und die Aesopische Fable im Mittelalter*, Berlin.
- Patillon, M. and Bolognesi, G. (1997) *Aelius Théon: Progymnasmata*, Paris.
- Perry, B. E. (1940) “The Origin of the Epimythium”, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 71, 391-419.
- (1952) *Aesopica*, Urbana.
- (1965) *Babrius and Phaedrus*, LCL 436, Cambridge.
- Rabe, H. (1926) *Aphthonii progymnasmata*, Leipzig.
- Rutherford, W. G. (1883) *Babrius*, London.
- Vaio, J. (2001) *The Mythiambi of Babrius: Notes on the Constitution of the Text*, Spudasmata 83, Hildesheim.
- Wright, W. C. (1923) *The Works of the Emperor Julian*, III, LCL 157, London.
- 岩谷智・西村賀子訳 (1998) 『イソップ風寓話集パエドルス/バブリオス』, 叢書アレクサンドリア図書館第10巻, 国文社.
- 堀尾耕一 (2006) 「プロギュムナスマタ文献の伝承について」, 『フィロロギカ——古典文献学のために』 I, 1-18.
- 吉川斉 (2008) 「「寓話」成立に関する一考察——“イソップ寓話”認識の成立——」, 『東京大学西洋古典学研究室紀要』 IV, 19-50.
- (2010) 「初期イソップ集成編者と「寓話」——ファエドルスおよびバブリオスの“イソップ寓話”認識——」, 『東京大学西洋古典学研究室紀要』 VI, 35-67.